なとひどく怒られた。青山学院大学に入学し、ロシア現代社会学の袴田教授のゼミ生になり、そこで〝知識人〟という言葉に多く触れるようになった。先生曰く、昔の人は、知識を仕入れることに貪欲で、とにかく勉強したと。台湾の李登輝前総統なんぞは、君たちより上手な日本語を話すぞと。その話の中で真っ先に私が思い出したのは、父だった。

父はとにかく、最期まで、本を読み、インターネットに興じて、貪欲に知識を増やそうとしていた。最先端を追いかけようとしていた。決して〝古い〟人間に留まらず、今起きていることに興味を示していた。亡くなる二日前に見舞いに行った際には、ライブドアによるフジテレビ買収騒動の件も話した。

父は、私が小学生の頃は、既に会社では取締役になっており、家に車が迎えに来る立場になっていた。今の国立の実家に引っ越してきたのは、私が幼稚園の年長の頃だから、サラリーマン生活でも、最も余裕があった時だったのかもしれない。私は姉や兄と8歳以上年が離れているが、彼らが小さかった頃の父親の印象と、私が小さかった頃の父親の印象とは、当然かなり違う。

当時の父の日課は、誰よりも朝早く起き、体操し、顔を洗い、歯を磨き、着替えて新聞を読み、朝食を取って、万全の体勢で出勤するというものだった。酔って帰ってきた翌日もそうしていたと思う。今考えると、自分が同じようにするには、相当の覚悟が必要だ。先ほどからしつこいが、本を読む量も多かったと思う。高校生になると、いろいろな本を薦めてくれた。大学進学は向いていないと思い始めたら、マックスウェーバーのプロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神を買ってきた。論文で頭を悩ますようになったら、ピータードラッカーの本を薦められた。本をよく読んだ兄と違って、不安で仕方が無かったに違いない。

恐らく、覚えている限りで一番最後に渡されたのは、本ではなく、有名な詩だった。サムエル・ウルマンの「青春」。これは、私だけでなく、兄にも渡していたと思う。思い出してみて初めて繋がったが、この詩の内容こそ、彼の生き様そのものだったのではないだろうか。「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方を言う。」

父は晩年、いろいろと悩むことも多かったと思う。くやしいという思いもしたかもしれない。死そのものについても、そう思ったに違いない。人間はそういう意味で、生まれてから死ぬまで、このくやしさと縁が切れないものかもしれない。それでも死ぬ間際まで強靱な精神力で病と闘う意志を鮮明にし、希望を捨てなかった。ただ、亡くなる二日前、死を察してか、自分の息子が今後生きていかなければいけない、日本という国を憂いていた。国に興味を持たない人を「改宗」させるにはどうしたら良いのか…と。

私は、今、香港でこの文章を書いている。国有化を経て小さくなってしまった銀行が、再度海外で挑戦していくための子会社の設立と運営を任されることになっている。海外が大好きだった父に胸を張って、報告したかった。その矢先の出来事だった。最期の時も一緒にいてあげられず、そのことが、今でも大変くやしく、無念でならない。大げさかもしれないが、強靱な意志を継いで、いつも前を向いて生きて行こうと思う。「頭を高く上げ希望の波をとらえる限り、八〇歳であろうと人は青春にして已む。」

宮下季郎氏より

石丸圭亮兄とは3号時代の一年近くを正に同じ釜の飯を喰べて過した仲ですが、戦後の進学から就職、停年までの人生は全く別個の道を歩んで終ろうとして居ます。が、十年ほど前、停年後の仕事にそれぞれが過して居た頃、片や韓国北部の山の中、片や南部海際の工場で夫々数年を過した頃がありました。

ソウルオリンピックの前後で韓国も次第に国際性に留意し始め、政治・教育・社会問題を外国人とも語り合える空気が次第に濃くなって居りました。

単身赴任の二人が休日前の一夜を語らって日韓問題を杯を傾けながら論じた事もあります。

そして帰国後一年以上経った或る日、部厚い小包郵便が送られて来ました。

「一市井人による韓国点描と日韓歴史覚書」。A-4版百余頁の大作で倭寇の時代から始まる韓国の歴史を詳細に現代まで追跡した一大読物でした。会報にのせるだけの記事もないまま一寸した思い出を記して置きました。

松本善明氏より

石丸さんは思い出の深い三号のときに本校五部でともに分隊の先任をつとめていましたので、いろいろ活動をともにしていました。その後交流はありませんでしたが、訃報に接し、謹んでお悔みを申しあげ御冥福を祈ります。